

昭和 36 年 8 月 6 日 福岡県築上郡吉富町 八幡古表神社 傀儡子の舞

現在の八幡古表神社の祭礼は、毎年 8 月 6 日に神社所蔵の傀儡子に着せる着物を曝暑するものである。「おいろかし」という。大名やその奥方、御殿女中寄進のものから、村人の出産、結婚、病気恢復祈願等のものが数千ある。神舞のとき着せて舞って欲しと寄進したものである。これの虫干を社殿一面にする。仲々見事である。

その外に氏子（主として漁業者）の大漁祈願の船祭が隔間的にある。またこれとは別に時々（もとは 60 年に 1 回ともいう）傀儡子人形を舞わすことがある。

傀儡子の舞はもと宇佐八幡の放生会に当って宇佐の神輿が和間の浜の浮殿に御神幸があった際、この吉富町の古表社と伊藤田の古要社から、それぞれ傀儡子舞の船を仕立て、和間浜まで行き浮殿の前で船上で傀儡子を舞わしたとある。

これを本年は八幡古表神社自体で、復活して、当日は大漁祈願の船祭を盛大にやり、これを放生会になぞらえて、神輿舟を仕立て、山国川の川口より海に出て、海上中津灯台の附近まで船を進めて、そこで、宇佐から来た海上神楽による放生会式を行い、これに伴する大漁飾船は 40～50 双に及ぶということである。

その間神社では「おいろかし」の行事があり、夜 9 時頃から境内神楽殿で傀儡子の神舞及び神相撲をやる。

福岡県文化財調査報告書第 18 集「八幡古表社の傀儡子」

現在、神社には人形 47 体ある。

わが国の操り人形の原始形態を伝えている。神舞人形は人形の両手につけた 2 本の糸を操る人が片手の指にとり、他方の手で人形の足の部分を握って舞わす。

相撲人形は人形の両手及び片足（動く方）につけた 3 本の糸で操る。

人形を操るものは熊谷宮司一統のものに限る。